秋田県文化財調査報告書232集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XII

—新町遺跡—

1993・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XII

—新町（しんまち）遺跡—

1993・3

秋田県教育委員会

序

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から横手市までの57.4kmは、平成３年７月に開通し供用されており、現在は横手市から岩手県湯田町までの区間15.8kmについての工事が、進められています。

しかし、本区間の路線上には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成２年から工事に先立って、遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めております。

本報告書は、平成２年度に調査しました横手市新町遺跡の調査成果をまとめたものであります。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸に存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、横手市、横手市教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成５年３月19日

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　　言

1．本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の12冊目の報告書である。

2．本書は、平成２年度に発掘調査された横手市に所在する新町遺跡の調査成果を収めたものである。

3．調査の内容については、既にその一部が発掘調査報告会などで公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。

4．本書の執筆は、大野憲司が行った。

5．本書に使用した地図は、国土地理院発行の５万分の一、２万５千分の一『横手』地形図である。

6．遺構土層図中の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

7．挿図中の遺物番号は、遺構内外の出土を問わず、土器・石器毎に通し番号を付してあり、番号は図版中の遺物番号と対応する。

目　　次

序
例　　言
目　　次
挿図目次
図版目次
第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査に至るまで …… 1
　第2節　調査の組織と構成 …… 2
第2章　遺跡の立地と環境 …… 4
　第1節　遺跡の位置と立地 …… 4
　第2節　歴史的環境 …… 4
第3章　発掘調査の概要 …… 9
　第1節　遺跡の概観 …… 9
　　1　遺跡の立地と推定範囲 …… 9
　　2　遺跡の現況と層序 …… 9
　　3　遺構と遺物の分布 …… 10
　第2節　調査の方法 …… 10
　第3節　調査経過 …… 12
第4章　調査の記録 …… 14
　第1節　検出遺構と遺物 …… 14
　　1　縄文時代の検出遺構と遺物 …… 14
　　2　時期不明の遺構 …… 19
　第2節　遺構外の出土遺物 …… 20
　　1　土器 …… 20
　　2　石器 …… 25
第5章　まとめ …… 26

挿　図　目　次

第１図　新町遺跡の位置 …… 3
第２図　遺跡の位置と路線図 …… 5
第３図　周辺の遺跡 …… 7
第４図　工事計画と調査区 …… 8
第５図　遺跡の基本層序 …… 10
第６図　新町遺跡と周辺の地形 …… 11
第７図　グリッド配置と検出遺構配置図 …… 13
第８図　ＳＫＦ03・04袋状土坑、ＳＫ06・07・08土坑 …… 15
第９図　ＳＫ10・11・13・14・15・16土坑、LM50Ｐ１、柱穴様ピット … 21
第10図　遺構内出土遺物 …… 22
第11図　遺構外出土土器 …… 23
第12図　遺構外出土石器 …… 24

図　版　目　次

図版１　１．新町遺跡遠景（東▷）
　　２．新町遺跡調査区遠景（東▷）
図版２　１．調査区全景（西▷）
　　２．Ｂ区全景（南西▷）
図版３　１．ＳＫＦ03・04袋状土坑、ＳＫ06～08土坑 検出状況（西▷）
　　２．ＳＫＦ03袋状土坑 土器出土状況（北▷）
　　３．ＳＫＦ04袋状土坑 土層断面状況（西▷）
図版４　１．ＳＫＦ03袋状土坑 完掘（南▷）
　　２．ＳＫＦ04袋状土坑 完掘・土器出土状況（東▷）
　　３．ＳＫ08土坑 完掘・土器出土状況（東▷）
　　４．ＳＫ10土坑 完掘（南東▷）
　　５．LM50グリッドＰ１柱穴 断面（西▷）
　　６．ＳＫ16土坑 完掘（北▷）
　　７．ＳＫ15土坑 土層断面（西▷）
　　８．ＳＫ11土坑 土層断面（西▷）
図版５　遺構内出土遺物・遺構外出土遺物（１）
図版６　遺構外出土遺物（２）

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路である。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市－大曲市を経て秋田市に至る総延長108kmに達する。このうち、秋田－横手間57.4kmについては、昭和53年11月の第８次施行命令によって具体化し、既に平成３年７月に供用が開始されている。

秋田－横手間の道路計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の扱いについては、昭和60年４月に日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議した結果、計画路線の変更が無理であることなどから、記録保存の措置を取ることで合意し、昭和60年の河辺郡河辺町七曲地区に所在する６遺跡を皮切りに平成元年度の仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅱ遺跡まで、合計27遺跡の発掘調査が実施され、それぞれに報告書が刊行されている。(註１)

横手インター・チェンジ（Ⅰ・Ｃ）以東の横手－湯田間19.7kmについては昭和61年３月に第９次施行命令が下された。これに伴い昭和62年３月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年５月と同63年６月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。(註２)また、横手Ⅰ・Ｃ以東の横手市分についての分布調査は、横手－秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、４遺跡の存在することが報告されていた。(註３)これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手Ⅰ・Ｃから北上市側に、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原・新町遺跡（以上、横手市）、茂竹沢・小田Ⅲ・小田Ⅱ・小田Ⅰ・虫内Ⅱ・虫内Ⅰ・岩瀬・中島・相野々・上谷地・越上遺跡（以上、山内村）である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田Ⅰ・柳田Ⅱ遺跡、平成元年には小松原遺跡西半部、平成２年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成３年には新町遺跡北半部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田Ⅰ・柳田Ⅱ・小松原遺跡については遺跡の範囲が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる攪乱が著しく遺構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断した。(註４)

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成２年に虫内Ⅰ遺跡、(註５)平成３年に茂竹沢・虫内Ⅱ・岩瀬

・中島・力石Ⅱ・越上遺跡[註6]、平成４年に小田Ⅴ[註7]・小田Ⅳ・虫内Ⅲ・相野々・上谷地遺跡について実施した。その結果、中島・相野々・力石Ⅱ遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成２年に、虫内Ⅰ遺跡の南東側と虫内Ⅱ遺跡の西側、及び上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この３つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内Ⅲ遺跡・小田Ⅳ遺跡・力石Ⅱ遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内Ⅲ・虫内Ⅱ・虫内Ⅰ・小田Ⅳ・小田Ⅴ・茂竹沢遺跡の９遺跡となったのである。

横手市の１遺跡・山内村の９遺跡に対する発掘調査は、平成２年度の新町遺跡から開始され、平成３年には越上遺跡、岩瀬・虫内Ⅰ遺跡の一部、虫内Ⅱ遺跡、茂竹沢遺跡が、平成４年には上谷地・虫内Ⅲ遺跡、虫内Ⅰ遺跡の一部、小田Ⅳ遺跡が実施されている。

第２節　調査の組織と構成

所 在 地	秋田県横手市大屋新町字新町36外
調査期間	平成２年８月27日～10月18日
調査面積	２，２３０㎡
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	大野　憲司（秋田県埋蔵文化財センター　学芸主事）
	佐藤　尚明（　〃　非常勤職員）
調査総務担当	佐田　茂（秋田県埋蔵文化財センター　主査、　現：農業科学館）
	高橋忠太郎（　〃　主事、　現：農業科学館）
	皆川　清（　〃　主　査）
	佐々木　眞（　〃　主　任）
調査協力機関	横手市　横手市教育委員会

註

1　秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ～XⅠ』秋田県文化財調査報告書第150・166・180・186・189・190・191・205・206・207・209集　1986～1991(昭和61～平成３年)

2　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第179集　1989（平成元年）

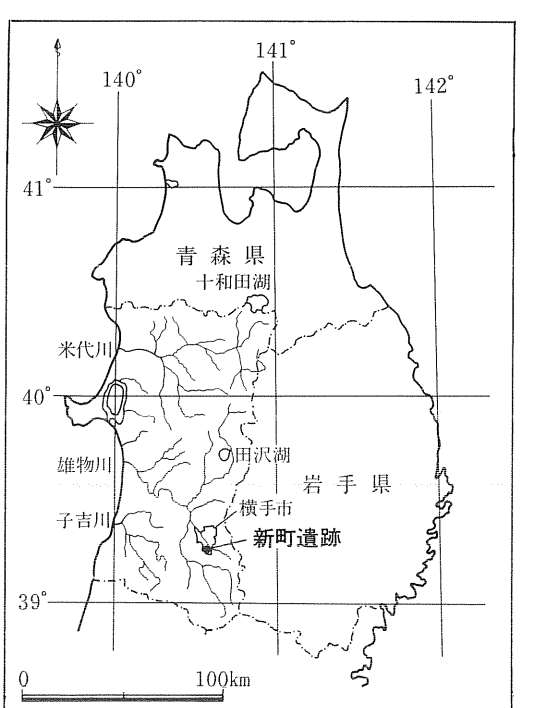
3　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第93集　1982（昭和57年）

4　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集　1990（平成２年）

5　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第217集　1991（平成３年）

6　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第226集　1992（平成４年）

7　前述の小田Ⅰ・小田Ⅱ・小田Ⅲ遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したこと、地形的には一つの遺跡とするのが妥当であること等から、これをまとめて小田Ⅴ遺跡とした。



第１図　新町遺跡の位置

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と立地

新町遺跡は、秋田県横手市大屋新町字新町に所在する縄文時代の遺跡である。ＪＲ奥羽本線柳田駅の北東約0.8km、東北横断自動車道秋田線横手Ｉ・Ｃの東約0.8kmに位置し、調査区中央で北緯約39°16′41″、東経約140°33′43″である。

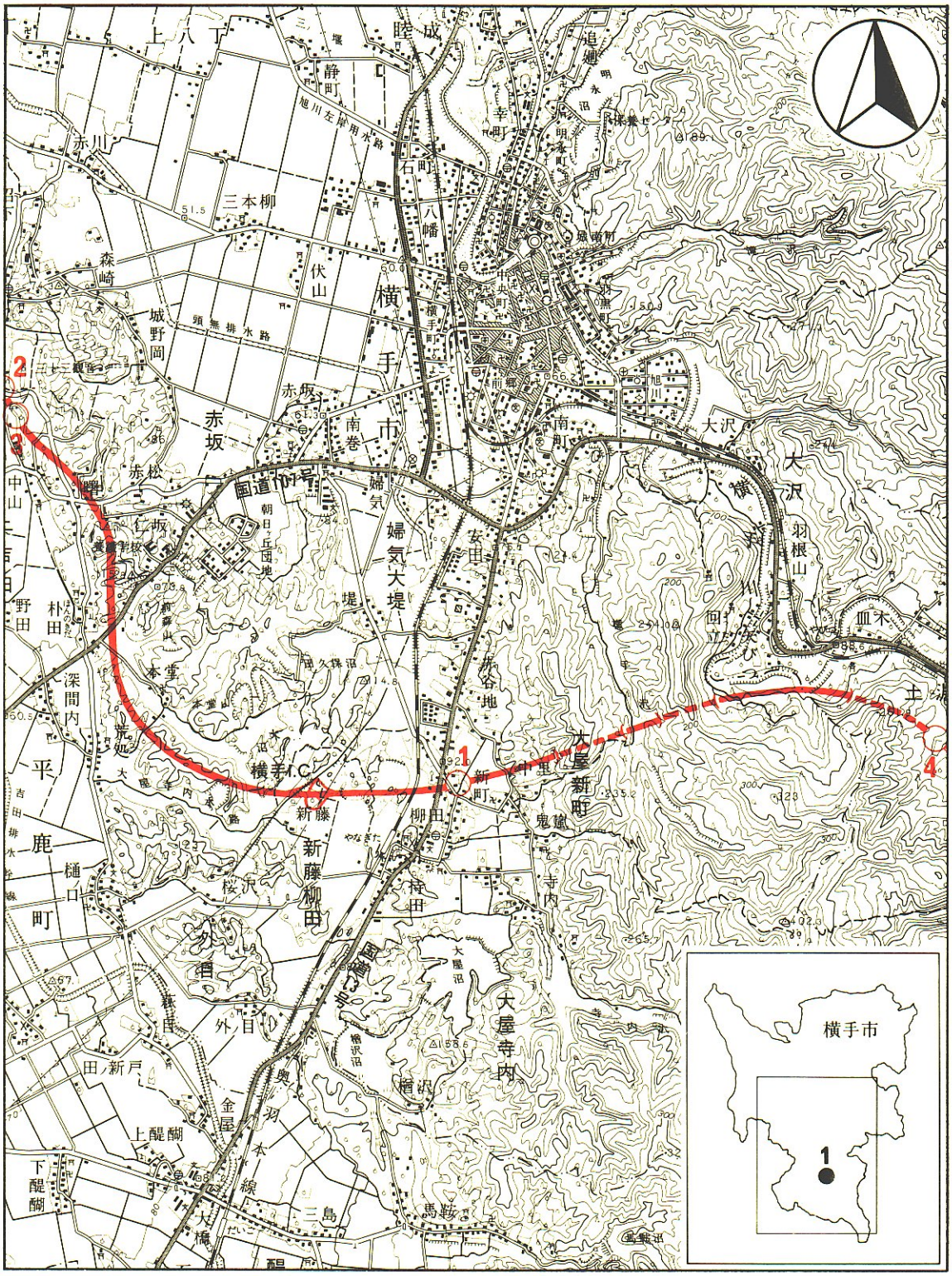
遺跡の位置は、横手盆地中央部東側の金峰山山地の支脈から、沖積地の中へ北西方向に延びる中山丘陵地の付け根部分にあたる。この付近の山麓には極く小規模な水平的複合扇状地が発達しており、遺跡は寺内沢及びその北側の沢によって形成された小扇状地の扇央から扇端部にかけての微高地上に立地している。この小扇状地の特に扇頂～扇央部にかけては略南北方向に連なるいくつかの微細な起伏が見られ、微高地を中心に縄文時代中期～晩期の遺跡が集中している。新町遺跡は、そのような遺跡群の北西側にあたる。

遺跡周辺の地形は、金峰山山地のうちの北側に延びる標高100～250mの山地が遺跡の東側に連なり、南～西側にかけては大屋寺内付近から北西側に標高50～130mの支脈が派生して中山丘陵と呼ばれる緩斜面の多い丘陵地となっている。そして、北側だけは開けており幅500～700mの沖積地が続き、横手市街地西側の広大な沖積地に続いている。この遺跡北側の回廊状の沖積地は平面的には河川の流路に沿うような形を呈しているものの、かつてこの部分が大きな河川の流路となったことはないようで、このため段丘状の平坦面の発達もほとんど見られない。また遺跡の周辺には、沖積地との比高差が30～50mの小さな残丘が小独立丘状に残っているが、それらの中で、頂部に平坦な面があるものは少なく、斜面はなだらかなものが多い。

第２節　歴史的環境

新町遺跡は、昭和56年に東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財分布調査で発見された縄文時代晩期の遺跡である。

第３図(註１)は、新町遺跡の周辺、横手市南端部の東西約3.8km、南北5.3kmの範囲に所在する遺跡の分布図である。この範囲における各時期の遺跡は、旧石器時代から中世城館までのものがあるが、弥生時代と奈良時代の遺跡を欠いており、発掘調査された遺跡も少ない。また、本図幅中には、右上に横手川の河岸段丘が見える以外段丘面はなく、縄文時代の遺跡は、以下の①～⑥に立地している。①山地上部の平坦部やその突端部、②丘陵頂部のせまい平坦面とその緩斜



第２図　遺跡の位置と路線図

1：新町遺跡　2：上猪岡遺跡
3：竹原窯跡　4：茂竹沢遺跡

1：50,000　横　手

1000 m　0　1000　2000　3000

面、③小独立丘陵のせまい緩斜面とその直下の沖積地、④沖積地中の微高地、⑤沖積地、⑥河岸段丘上。

旧石器時代の遺跡としては大剰院塚（第３図中の134で、この番号は第１表の遺跡番号と共通する。以下同じ）があり、昭和33年と平成２年にそれぞれ発掘調査が実施されている。(註２)

図幅中で、縄文時代の遺物は31遺跡で見つかっているが、その遺物の時期が明らかなのは13遺跡で、その中には草創期・早期の遺物は含まれていない。

前期の遺物は、大剰院塚（134）・西ヶ坂（137）の２遺跡で出土しており、両遺跡共に南から北に延びる丘陵突端の台地上に立地する。

中期の遺物は柳堤（139）・堀ノ内（153）・大屋寺内字寺村Ａ（154）・大屋寺内字寺村Ｂ（155）で表面採集されている。

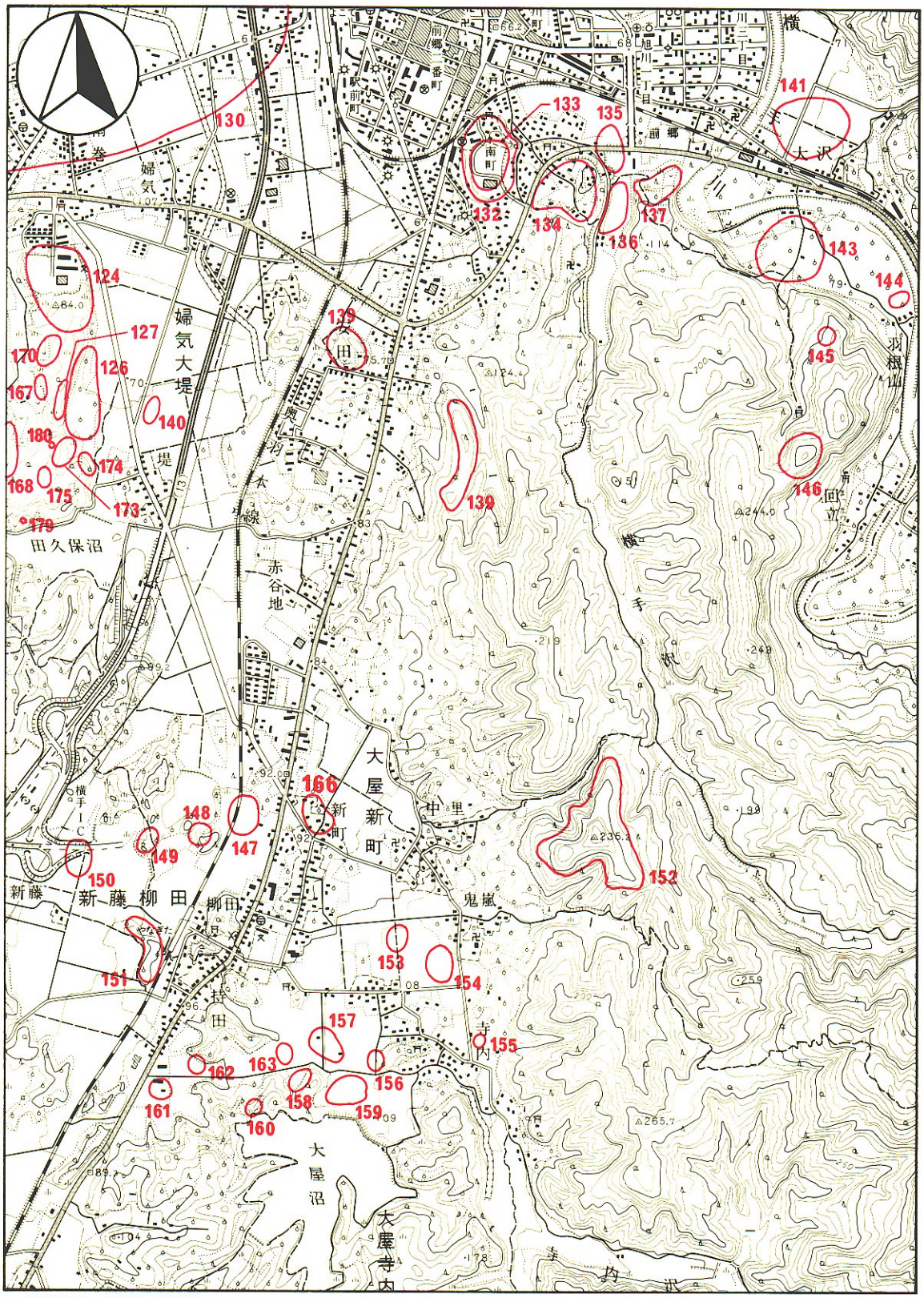
後期の遺物は、郷士館Ｂ（126）・柳堤・堀ノ内・大屋寺内字寺村Ａで採集されており、郷士館Ｂ遺跡で晩期の遺物を伴い、他の３遺跡は中期の遺物を伴っている。

晩期の遺物は、新町遺跡（166）以外に郷士館Ｂ・三井寺（135）・下庭当田（143）・寺内（156）・長谷山乙（160）で採取されている。この中で遺物が多く採集されているのが三井寺遺跡で、かなり大規模な遺跡であったと推定されるが、宅地化等によって消滅してしまった可能性が強いという。

周　辺　遺　跡　一　覧　表

番号	遺　跡　名	時代(時期)・性格	番号	遺　跡　名	時代(時期)・性格	番号	遺　跡　名	時代(時期)・性格
124	郷土館跡	不明	144	嶽鼻	縄文	159	長谷Ｂ	縄文
126	郷土館Ｂ遺跡	縄文（後～晩）・平安	145	上庭当田	縄文	160	長谷山乙	縄文（晩）
127	郷土館窯跡	平安（窯跡）	146	天狗館跡	不明（城館）	161	笹崎Ａ	縄文
130	条理制跡	奈良時代後以降	147	小松原	縄文	162	笹崎Ｂ	縄文
132	前郷館跡	近世（館跡）	148	柳田Ⅰ	縄文	163	笹崎Ｃ	縄文
133	南町	縄文	149	柳田Ⅱ	縄文	166	新町	縄文（晩）
134	大乗院塚	旧石器・縄文（前）	150	新藤柳田字中村	縄文	167	郷土館Ｄ	縄文・平安
135	三井寺	縄文（晩）	151	礼塚	縄文	168	富ヶ沢Ｄ	縄文・平安
136	羌山	縄文	152	大屋館跡	中世～近世（城館）	170	郷土館Ｃ	縄文・平安
137	西ヶ坂	縄文（前）	153	堀ノ内	縄文（中～後）	173	富ヶ沢Ａ窯跡	縄文・平安
138	安田館跡	不明（城館）	154	大屋寺内字寺村Ａ	縄文（中～後）	174	田久保下	縄文・古墳・平安
139	柳堤	縄文（中～後）・平安	155	大屋寺内字寺村Ｂ	縄文（中）	175	富ヶ沢Ｂ窯跡	平安
140	中田	中世～近世	156	寺内	縄文（晩）	179	富ヶ沢３号塚	近世
141	大沢字前田	縄文	157	長谷下	縄文	180	富ヶ沢４号塚	近世
143	下庭当田	縄文（晩）	158	長谷Ａ	縄文			

（第３図に対応する）



第３図　周辺の遺跡　　166：新町遺跡

1：25,000　横　手

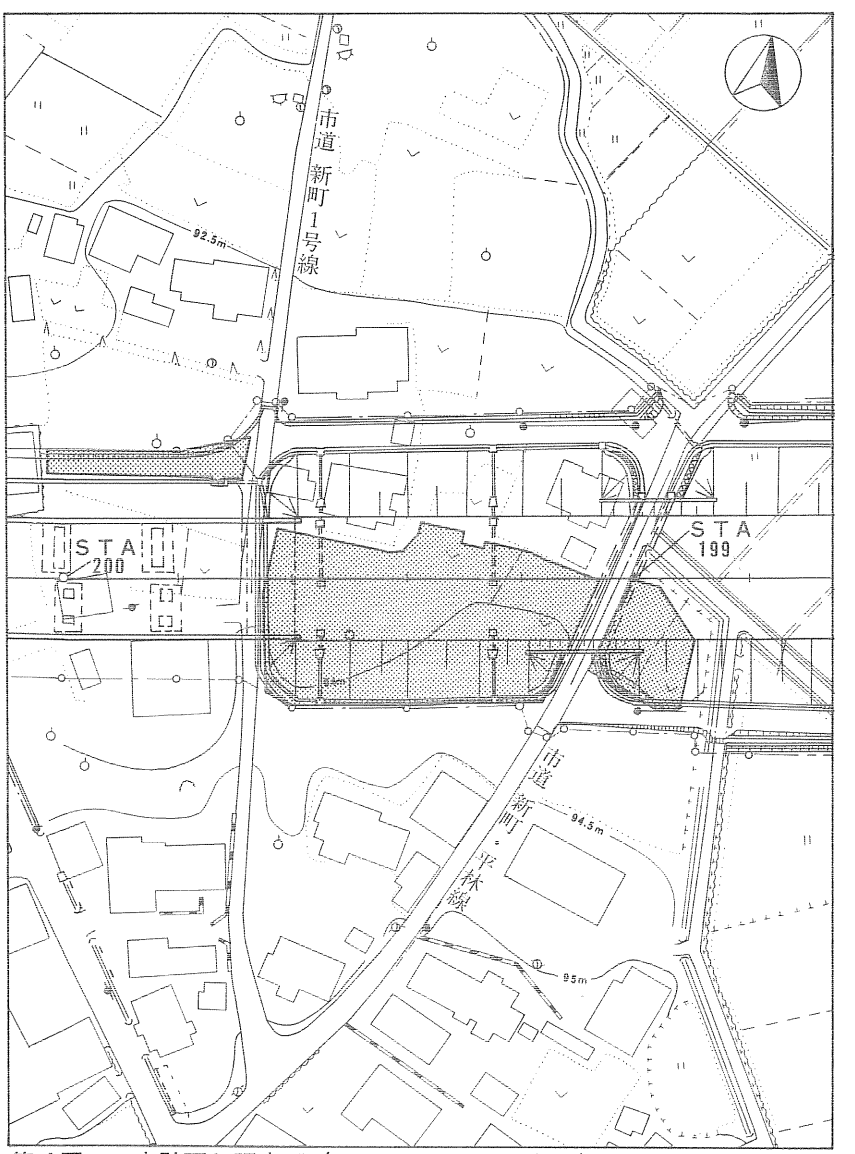
500m　0　500　1000　1500

註

1　第３図は、秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）に（遺跡番号166番まで）、その後の横手市の調査と「秋田ふるさと村建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査」の結果を含めた遺跡の分布状況を示したものである（125と129は欠番）。横手市教育委員会『秋田県横手市　遺跡詳細分布調査報告書』横手市文化財調査報告11　1986（昭和61年）

2　しかし昭和33年の発掘調査では、良好な資料は得られなかったようで、平成２年の調査でも発掘担当者である澤谷敬氏の教示によれば、旧石器時代の明確な遺物は出土せず、前期大木式土器中心の遺物が出土し、数基の焼土遺構が検出されているという。

奈良修介、豊島昴『秋田県の考古学』吉川弘文館1967（昭和42年）



第４図　工事計画と調査区（スクリーントーン部分）

0　60m

第３章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観

１　遺跡の立地と推定範囲

新町遺跡は横手市の南東部、寺内沢とその北側にある小支流によって形成された小さな扇状地にある縄文時代晩期の遺跡である。この小扇状地には、南東から北東に流れるいくつかの小さな流路があり、その中の中央を流れる流路西側には、比高差１～1.5mの微高地が流路に沿う形で分布し、横手市大屋新町字新町集落が形成されている。今回の調査区は新町集落の北西端部近くに当たる。新町遺跡は、地形的にあまり変化のない沖積地に立地しているため、遺跡の範囲を現況から把握することは困難であるが、調査中の周辺踏査では、今回の調査区外にも第５図の★・▲印で示したところから剥片や縄文土器の細片が採集されていることから、新町遺跡の広がりは今回の調査区から南方約400mの▲印あたりまでの南北400m×東西250mの範囲を想定することも可能で、この場合、今回の調査区は遺跡北西端部に当たると考えられる。

２　遺跡の現況と層序

遺跡の現況は、宅地及び畑地、果樹園などで調査区はリンゴを主とする果樹園であった。調査区内に於ける遺跡の層序は、基本的に地点による大差はなく、南側ほど各層位が薄く調査区中央部から北東側ほどそれが厚くなる。第５図は、第７図中のＡ－Ｂ、Ｃ－Ｄ地点における土層断面図である。

第Ⅰ層は黒褐色（10YR2/2）を呈する表土、耕作土である。小砂利を１～５％ほど含み、かたくしまっている部分としまりのない部分とがある。第Ⅱ層は赤黒色（10YR1.7/1）で、径0.5～２cmの小砂利を10～20％含み、かたさしまり共に弱い。木炭片を含んでいることもあり、縄文土器や剥片はこの層中の下部から出土することが多い。縄文時代の生活面がこの層中に存在したものと考えられる。第Ⅲ層は黒褐色（7.5YR3/2）の砂利を主体とする層で、径３～５cmの水磨された扁平な円礫が50～80％を占める。Ⅲ′層は調査区内に部分的に見られる層で、にぶい黄橙色（10YR6/4）を呈する粘質土層である。粘性が比較的強くしまっている。第Ⅳ層は、褐色（7.5YR4/4）の砂利層で全体的にかたいが崩れ易い。部分的に本層の存在しない部分もある。第Ⅴ層は明黄褐色（10YR7/6～6/6）の砂質粘土層で、地山と考えられる。粘性は弱いがしまりが良い。このような中にあって、調査区東部・西部は後世の畑作等によって攪乱を受けている部分が多く、基本層位の第Ⅱ層が既に失われているか極く薄くしか残っていない。なお、第Ⅳ層の存在しないＳＫＦ03周辺では降雨後など地下水位が上がって土坑内に水が溜まること

が多かった。

3　遺構と遺物の分布

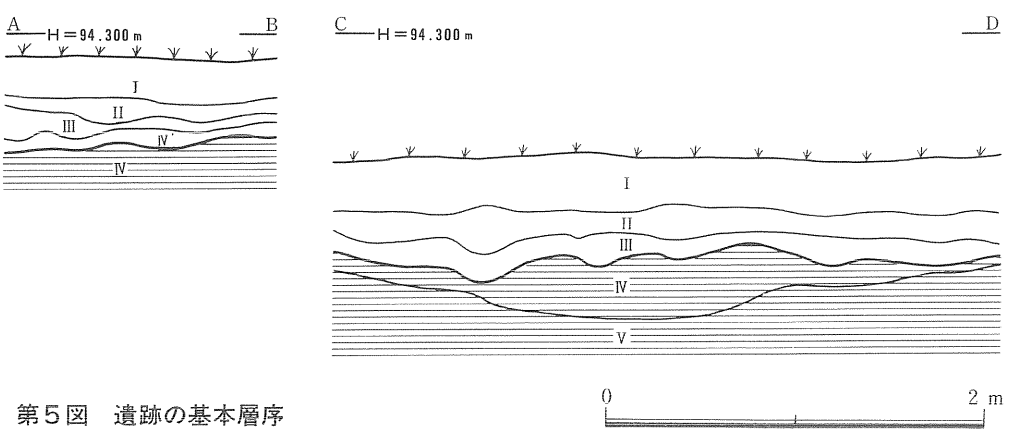
遺跡の立地及び層序から、調査区は縄文時代の生活面となった第Ⅱ層の赤黒色土（いわゆる黒ボク土）が堆積する前に、小流路もしくは小氾濫原となったことがあり、それが安定して黒ボク土が堆積するようになってから縄文人がその生活の痕跡を残すようになったものと考えられる。縄文時代の遺構と遺物は、調査区全体に散在する傾向にあるが、遺構の主なものはMB45グリッドを中心とする部分、遺物はこの部分と調査区東部に多い。

第２節　調査の方法

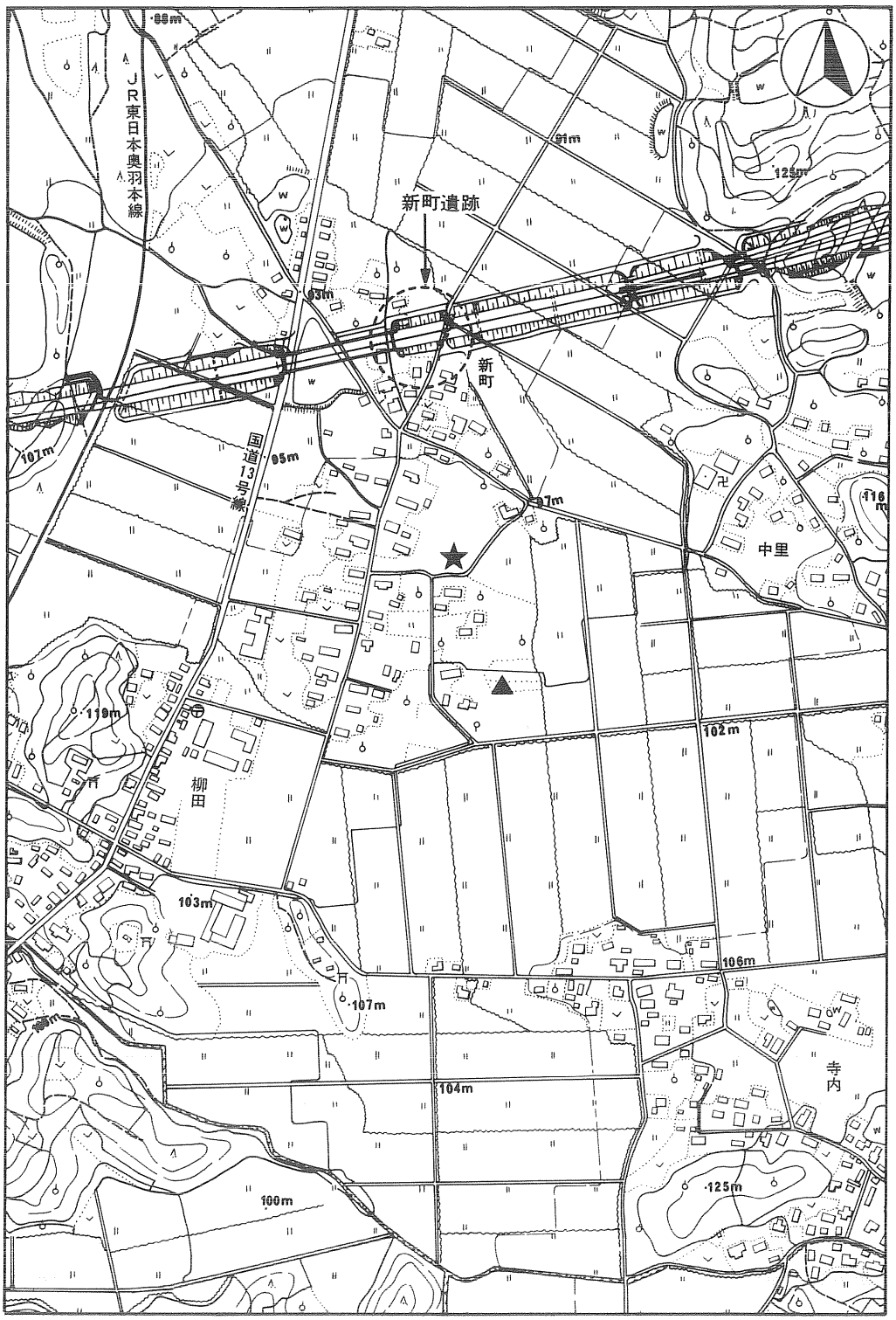
発掘調査は４×４ｍのグリッド法によって行った。調査区内にある計画路線の中心杭（ＳＴＡ199＋40）を原点とし、磁北方向を南北基線、これに直交する方向を東西基線とし、４ｍ毎にグリット杭を打設した。原点をMA50とし東から西へMA・MB・MC…MS・MT・NA・NBとアルファベット、南から北へ50・51・52～とアラビア数字を振り当てた。各グリットの名称はアルファベットとアラビア数字の組み合わせにより、４ｍグリットの南東隅の杭の名称MA50のごとく用いた。

検出した遺構には検出順に、01・02・……と番号を付し、その前にその遺構の略号を付けた。今回の調査で使用した略記号は、溝状遺構＝ＳＤ、土坑＝ＳＫ（袋状土坑＝ＳＫＦ）で、柱穴様ピットは検出されたグリッド毎にＰ１・Ｐ２のようにした。

遺構平面図は方眼杭を用いた遣方測量で1/20、もしくは1/10で作成した。発掘作業は表土除



第５図　遺跡の基本層序



第６図　新町遺跡と周辺の地形　0　500 m

去を含めて全て人力で行った。調査区の記述に当たっては、東西に細長い調査区の名称を以下のようにした。東西約110m、南北約35mの今回の調査区内には調査区を東西に分断して２本の市道が走っており、これによって分けられた調査区を東側からＡ区・Ｂ区・Ｃ区とした。

第３節　調査経過

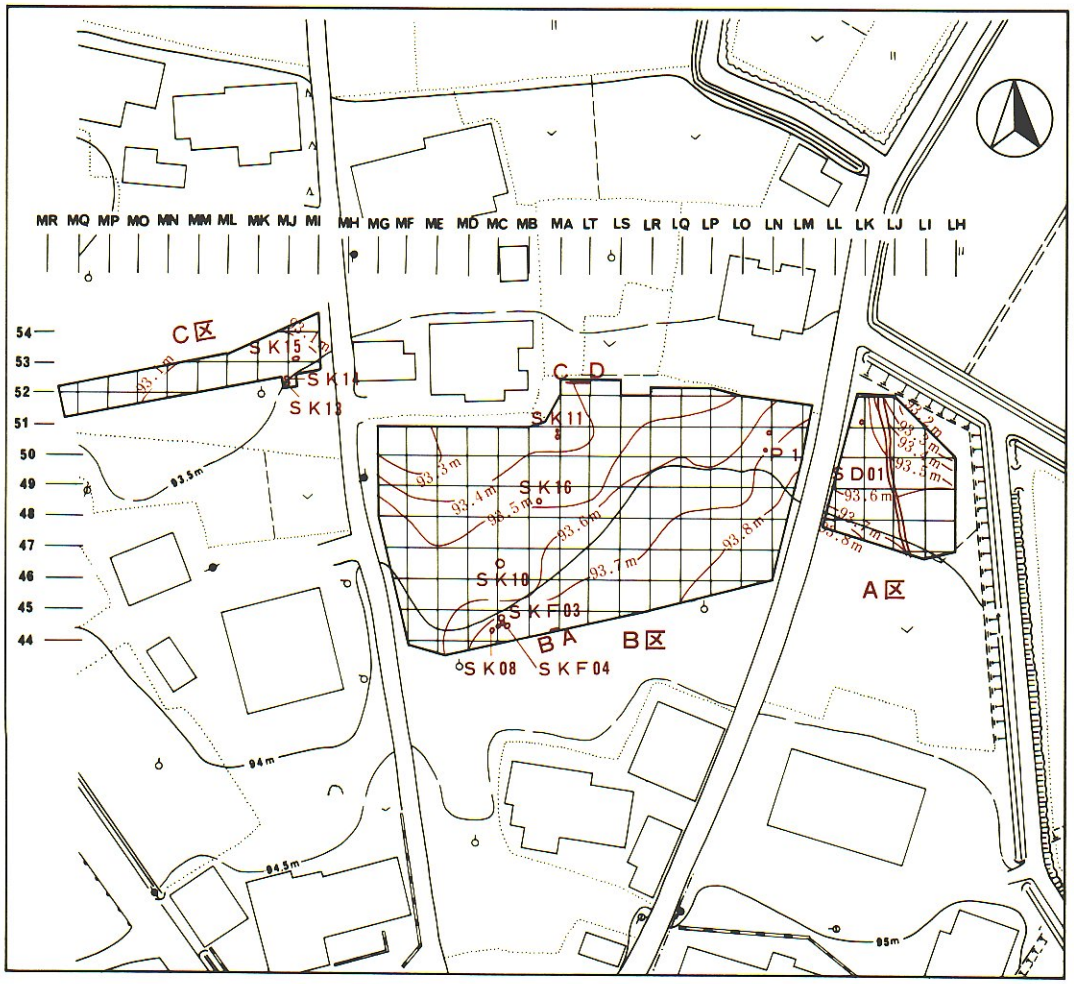
発掘調査は平成２年８月27日（月）から開始した。同日中にプレハブの設置、発掘機材の搬入を行い、翌28日には、調査区東側（Ａ区）から表土除去を開始した。Ａ区は、第２次大戦後間もなくまで宅地のあったところで現在は畑地である。このため、Ａ区東端部はその東側にある流路側に向かって下降しており、そこにはゴミ捨て場となっているところや、盛土された部分などがある。また、Ａ区は全体的に地山土までがうすく、畑の耕作土が地山上部にまで達している。８月31日までに時期不明の溝状遺構（ＳＤ01）１条や数個の柱穴様ピットを検出したが、出土した遺物は縄文土器と剥片が数点にすぎない。

調査区全体の中央部に当るＢ区の表土除去は一部Ａ区に併行して行っていたが、本格的には９月３日北東部から開始した。Ｂ区はリンゴ畑であったところである。同日にＬＤ50グリットで直径約１ｍで断面形が浅い摺鉢状を呈する土壙（ＳＫ02）を検出したが、床面近くの埋土中から現代の陶器片が出土したために、遺構としては扱わないこととした。９月６日までにLM・LN50グリットから縄文時代のものと考えられる径20～30cmの柱穴様のピット２～３個を検出したが、周囲も含めて遺物は僅少である。この部分は第Ⅲ～Ⅳ層の砂利層が東側ほど厚く堆積しており、ピットも砂利層を掘り込んだものである。

９月10日からはＢ区東部の調査と併行してＢ区南西部の調査にも着手した。この部分（MB44グリット）には、平成元年度の範囲確認調査時に検出した縄文時代の袋状土坑が存在する。同日この袋状土坑をＳＫＦ03とし、さらにその南東側１ｍにＳＫＦ03よりも小さい別の袋状土坑を確認したのでこれをＳＫＦ04とした。９月13日までにＢ区中央南部からは風倒木痕が数ヶ所で確認されたが、現代のゴミ捨て場があったりして撹乱も著しく、縄文時代の遺物は極く少なく確実な遺構も見えない。なお、９月11日～18日の１週間は雷を混じえた雨の日が多く、Ｂ区全域の表土除去を点々と行った。９月19日にはようやくの晴れ間を見て、ＳＫＦ03周辺の遺構検出に努めたところ周辺からＳＫ06～09の小規模な土坑４基を確認した。しかし９月20日には再び強風雨に見舞れ、調査区全体が湖のような状態を呈した。排水しても土坑内には浸透水があふれ出る状態であった。９月25日にはMB46グリットで縄文時代の土坑と考えられるＳＫ10を検出した。10月８日までにＢ区内で縄文時代の袋状土坑２基、土坑５基、柱穴様ピット２個を検出、精査・実測をして10月９日からはＣ区の調査に入った。

Ｃ区の調査を10月15日まで行ったが、縄文時代の遺物がフレーク１点で東部から時代不明の小さな土坑を３基（ＳＫ13・14・15）検出したにすぎない。

10月15日からは、Ｂ区の補足的な調査と、基本土層図の作成等を行い10月18日には機材の撤収を行って新町遺跡の今回の調査を終了した。



第７図　グリッド配置と検出遺構配置図

0　50m

第４章　　調査の記録

第１節　検出遺構と遺物

今回の発掘調査で検出された遺構には、土坑・柱穴様ピット・溝状遺構があり、縄文時代のものとして土坑６基と柱穴様ピット２基、時期不明のものとして土坑５基と溝状遺構１条がある。

１　縄文時代の検出遺構と遺物

埋土中及び周囲から出土した遺物や埋土の状況などから、確実に縄文時代に属すると考えられる遺構は袋状土坑２基と土坑４基、それに２基の柱穴様ピットの計８基である。

これらの遺構は柱穴様ピットを除いて調査区南西部に集中し、柱穴様ピットは調査区中央北東部に存在する。これらの遺構は時期的には全て縄文時代晩期のものと考えられる。

（１）袋状土坑

坑口部の径よりも、底面もしくは底面やや上部の径が大きい土坑で、断面形が袋のような形を呈する土坑である。２基検出されており、いずれも小規模なものである。

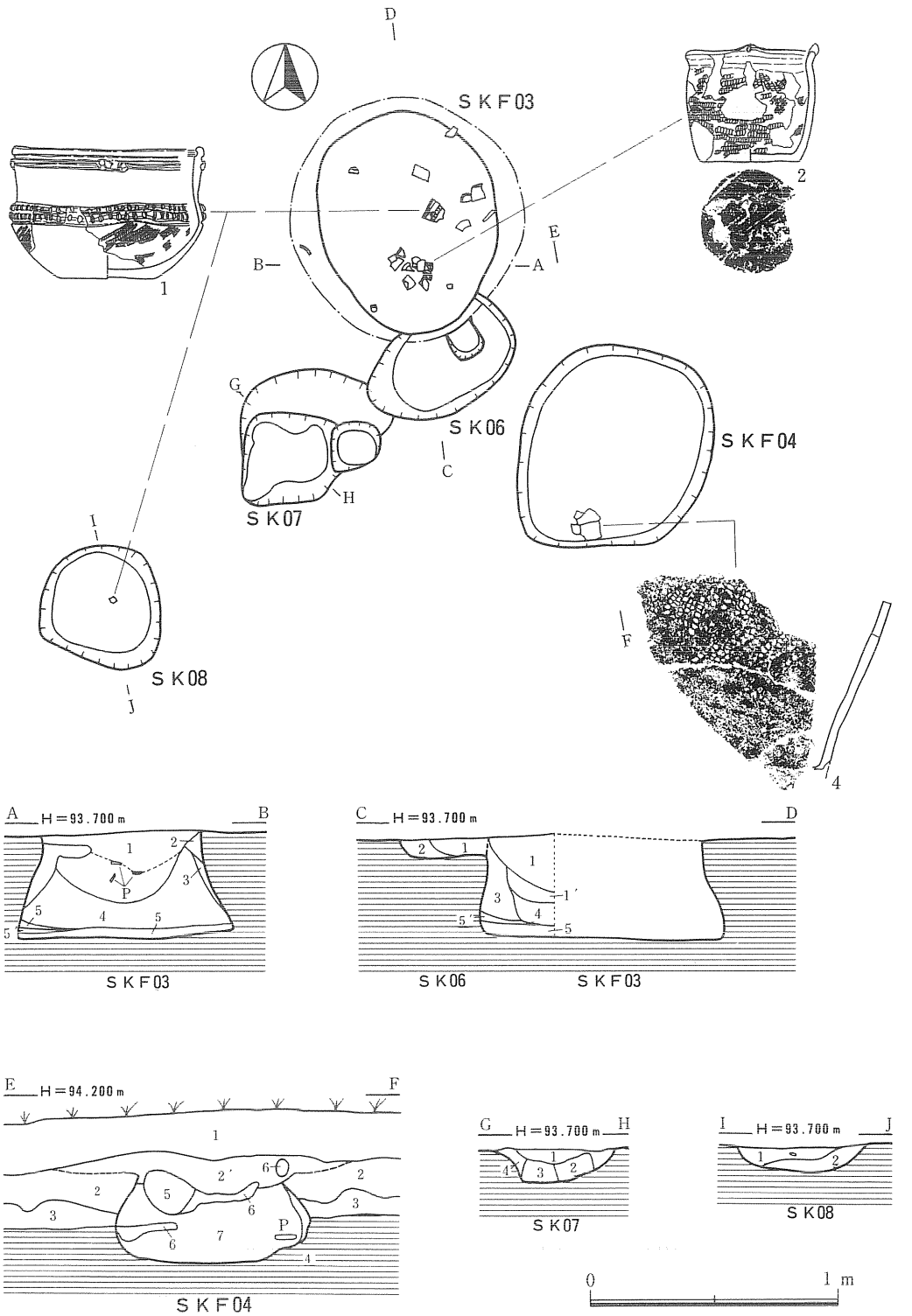
ＳＫＦ03袋状土坑（第８図、図版３・４・５）

調査区南西部、MB44グリットにある袋状土坑である。この部分MB44・MC44グリットには本袋状土坑の他にＳＫＦ04、ＳＫ06・07・08が集中しており、その中でも本袋状土坑が、これら土坑群中における位置・規模・出土遺物の点から中心的な存在となっている。本袋状土坑は南側で小さな土坑ＳＫ06と重複しており、本袋状土坑が新しい。

本袋状土坑の存在が確認されたのは、平成２年５月に実施した範囲確認調査によってであり、確認面は地山上面である。この時点で黒色土の範囲を半截し、約10～15cm掘り下げた段階で縄文時代晩期の土器片（第10図２の破片と３）が出土したので、該期の遺構と認めた。

規模・平面形は、確認面で長径90cm×短径70cmのずんぐりした楕円形（長軸方向は南－北）で、底面が直径95～100cmの円形を呈する。確認面からの深さは44cmであるが、ＳＫＦ04の例からすると本袋状土坑は、縄文時代晩期の生活面が存在すると推定される基本層位第Ⅱ層の黒褐色土中から掘り込まれていると思われる。第８図の断面図は既に坑口部が失われている図であり、本来の深さは60～70cmであったと推定される。底面は平坦でよくしまっており、壁面は明瞭でしっかりしている。

埋土は、５層が黒褐色（5YR2/1）土を主体にしておりこれに地山土粒子・径５～10mmの小ブロックが混入し、断面図左下にはボソボソした地山土が面をなして入っている。全体に比較的



第８図　ＳＫＦ03・04袋状土坑　ＳＫ06・07・08土坑

かたくしまっており、特に上面は平坦でかたくしまっている。４層は赤黒色（2.5YR2/1）土に地山土粒子を２％前後含む層で、ややかたくしまっている。この層の中央部には、直径約30cm厚さ10cmにわたって炭化物（クリの実を含む木炭片）や一部火熱を受けた感じの地山粘質土の集中する部分がある。この部分や本層全体から第10図１の土器片が散発的に出土した。本層は、５層や１′層と共に人為的に埋められた層である。３層と２層は黒褐色（5YR2/1）～にぶい黄橙色（10YR6/4）土でしまり・かたさ共に中位で、壁面の崩落土と思われる。１′層と１層は赤黒色（2.5YR2/1）の土で、分層はむづかしいが１′層の上部を中心に木炭片をわずかに含み地山土粒子も１層よりも多いことからこのように分けた。１′層の上部から第10図２の土器が１ヶ所にバラバラの状態で出土した。１層は、いわゆる黒ボク土に近い土で、木炭片をわずかに含む以外は地山土粒子もほとんど見えない。しまりと堅さは中位で、２・３層と共に自然堆積土と考えられる。

本土坑埋土中からは、小型鉢形土器が２個（第10図１・２）と深鉢形土器の小破片（３）が出土している。

１は、本土坑中に人為的に投棄されたと考えられる第４層中から、小さな破片で坑内全域に散らばる形で出土した。口径11.5cm、底径６cm、高さ８cmの鉢形土器である。口径に比べて底部がやや小さく、これから丸みをもつ胴部・直線的に立ち上がる口頸部へと続く。口縁端部は丸みをもってわずかに肥厚し平口縁で、頸部下端から胴部上半が薄い作りとなっており、断面形が緩いＳ字状を呈する。文様は口縁部と胴部上半にある。平滑になでられた口頸部の口縁部外面には２条、内面には１条の沈線が巡り、外面下段の沈線上には器周４カ所に２個１対の粘土瘤が付される。２個の粘土瘤の間は掻き除かれている。胴部上端には２本の隆帯、隆帯間とその下に各１条の沈線が巡る。隆帯上には縦位の刻みが４～５mm間隔で施されている。胴部には、緩い傾きのＬＲ縄文が施されている。また、この鉢形土器の内外面には漆が付着しており、特に内面全面と口縁部外面が厚い。付着している漆の色は極暗褐色で、表面に細かい皺が多いことから、この鉢形土器は漆を入れる容器もしくは漆精製容器として用いられたものと考えられる。なお、後述するように、この土器の破片の１片はＳＫ08土坑埋土中からも出土しており、それが接合した。

２は、１′層上面の窪み部分から、割れて一塊になった状態で出土した。口径８cm、底径６cm、高さ6.7cmのコップ状を呈する鉢形土器である。平板的な底部から、胴部が若干丸みをもちながらもほぼ直線的に立ち上がり、わずかに外反する短い口縁部に至る。口縁の１カ所に低いＡ突起があり、突起中央部には極く浅い刺突が一つだけ付されている。口縁部は、横位のなで調整により無文で、胴部にはＬＲ縄文が一部不定方向部分を含む横位に施されている。底部外面には笹の葉と思われる圧痕がかすかに残っている。全体の色調は内外面共に黒～灰褐色で、

胎土には細かい砂粒が15％前後含まれ、断面には微細な気泡状の小孔が見える。また、器外面胴部下半には黒色の漆状の付着物が幅１cm内外に薄く付着している。

３は、範囲確認調査時の№３トレンチの土坑１（今調査のＳＫＦ03）の埋土中（上部）から出土した深鉢形土器の胴部下半の破片である。胎土・色調・焼成等の比較から、後述するＳＫＦ04出土の深鉢形土器（第10図４）と同一個体のものと考えられる（接合はしない）。

ＳＫＦ04袋状土坑（第８図、図版３・４・５）

ＳＫＦ03と同様、調査区南西部MB44グリッドにある袋状土坑である。ＳＫＦ03から南東にわずか50cmの所に位置し、ＳＫＦ03検出面の精査及びその周辺の遺構精査中に検出した。ＳＫＦ03の東側に設定したセクションベルトが本袋状土坑のほぼ中心を南北に切る形になっており、地山上面での確認時には略円形の浅い土坑と思われたが、土層断面の観察から袋状土坑と確認したものである。この土層断面の状況では、本袋状土坑は縄文時代晩期の生活面が存在すると考えられる基本層位の第Ⅱ層中から掘りこまれている。規模及び平面形は、坑中位下半で直径80cm、坑底部で直径70cmの不整円形を呈する。坑口部はセクションベルトでは把握出来たものの、面的には確認出来なかった。セクションベルトから推測される坑口部の直径は60cmで、土坑全体の断面形状は、坑口部よりも坑中位下半が膨らむ袋状を呈する。坑口部からの深さは35cmで、地山上面からは15cmである。底面及び壁面はなめらかでしっかりしている。

埋土は、いずれも赤黒色（2.5YR2/1）を呈し、７層がやや堅くしまって底面近くに地山土粒子がシモフリ状に含まれているのに対し、６層は地山土粒子が全体に30～40％含まれて堅くしまっている部分と軟らかい部分とが混在している。５層は、７層と同色の土がブロック状に堅くしまっている部分である。底部近くの南端部から、第10図４の深鉢形土器の底部から胴部にかけての破片が斜めになって出土している。

第10図４は、底部から少し外傾して立ち上がる深鉢形土器下半の破片である。胴部には太くて粗いＬＲ縄文が施されているが、施文が非常に浅く、底部から約５cmの高さまでは縄文が見えない。胎土には径３～５mmの砂粒を含み、砂粒が器内外面に露出している。４個の破片が接合しているが、割口の一部には煤状炭化物が付着しており、容器として使用中に既にヒビ割れのあったことが分かる。また、煤状炭化物は内面の底部から５～６cm上にも付着している。この土器は、薄手の作りであるものの、縄文時代晩期のものと考えられる。

ＳＫ06土坑（第８図、図版３）

ＳＫＦ03南端部と重複している小さな土坑で、ＳＫＦ03同様地山上面で確認された。土層観察では、本土坑がＳＫＦ03袋状土坑に切られている。長径60cm×短径40cmの楕円形を呈し、確認面からの深さは８cmと浅い。埋土は、１層がＳＫＦ03の１層と同色であるが、ＳＫＦ03の１層よりも木炭片が少ないことから分層した。２層は黒褐色（7.4YR2/2）土で地山土粒子を約30

％ほどシモフリ状に含んでやや堅い。埋土中から遺物は出土しなかった。

ＳＫ07土坑（第８図、図版３）

ＳＫＦ03周辺の精査時に地山上面で土の汚れ部分があり、これをＳＫ07としたものである。遺構のプランとして上面および底面ともに明瞭ではないが、上面径約50cmの不整楕円形を呈し、底面南西部に最深部があり、断面形状は形のくずれた鍋底状を呈する。地山は、１層がＳＫＦ03・ＳＫ06・08等と同様の黒褐色土であるが、他は地山土とそれほど違わない明黄褐色土などである。埋土全体は、締まり堅さ共に中位～やや強である。

埋土中から遺物は出土していない。

ＳＫ08土坑（第８図、図版３）

ＳＫＦ03の南西1.3mにある直径約50cmの不整円形を呈する小さな土坑である。ＳＫ06・07などと同様、ＳＫＦ03の周囲を精査中に地山土上面で確認したものである。底径は約40cm、深さは確認面から10cmと浅く、断面形状はフライパン状を呈する。埋土は、１・２層共に赤黒色土（2.5YR2/1）で両者ともに地山土粒子を若干含み、やや堅く締まっている。

埋土の中央中位から縄文時代晩期の土器小破片が１点出土した。この小破片の内外面には漆が付着しており、後の接合作業の結果、ＳＫＦ03の埋土下部から出土した鉢形土器（第10図１）の口縁部であることが判明した。このことにより、本土坑が埋まった（埋められた）時期はＳＫＦ03と同時であると考えられる。

なお、ＳＫＦ03周辺の遺構群は、本土坑を含め、ＳＫ06・07及びＳＫＦ04に関しても、これらは全てＳＫＦ03を中心にするかのように分布していること、埋土がほぼ同様であること、ＳＫＦ03とＳＫ08、及びＳＫＦ03とＳＫＦ04からはそれぞれ同一個体の土器が出土していること等から、ほぼ同時期に構築された遺構群であると考えられる。また、ＳＫ06・07・08のプランは、土坑というよりも柱穴様のピットとも考えられるが、底面の状況から柱穴とするには疑問が多く、一応ここでは小規模な土坑とする。

ＳＫ10土坑（第９図、図版４）

調査区南西中央近く、MB46グリッドの地山上面で確認された。ＳＫＦ03・04、ＳＫ06～08土坑群の北側６～７ｍに位置する。平面形は、直径100cmの円形を呈し、確認面からの深さ25cmであるが、確認面よりも底面が若干ながら広がっている部分もあり、本来袋状を呈していた可能性もある。

埋土は４層に分けることが可能で、１層は基本層位の第Ⅱ層と同じであり自然堆積と考えられる。２層は黒褐色（5YR2/1）土で、堅く締まったブロック状の部分が多く、ブロック間は比較的間隙があってボソボソしている。３・４層と共に人為的に埋められたものと考えられる。２′層は木の根による撹乱か地山土粒子が多い。３層は赤黒（2.5YR2/1）～黒褐色（5YR2/1）

土に地山土粒子が10％前後含まれており、粘性が少しあり、強く締まっている部分と軟らかい部分とがある。４層は地山土を主体とする中に20～40％の割合で黒褐色土が混じっている。底面は、平坦で比較的よく締まっている。

埋土中から遺物は出土していないが、埋土の状況はＳＫＦ04などに類似しており、それらと同じ縄文時代晩期の土坑と考えられる。

（２）柱穴様ピット

調査区北東部から、縄文時代の柱穴様ピット２基（Ｐ１・Ｐ２）が検出されている。Ｐ１・Ｐ２はLM・LN50グリッドにあり、いずれもこの付近に分布する砂利層の上面で確認された。Ｐ１（第９図、図版４）は長径70cm×短径55cmの円形に近い楕円形を呈し、深さは30cmである。本柱穴様ピットは、耕作土直下の砂礫を30～50％含む黒褐色土層（第２層）と、その下の暗褐色を呈する砂利層（第５層）を掘り込んでおり、この部分では基本層位の第Ⅱ層は、耕作によって既に失われているものと判断された。埋土は赤黒色を呈する土で、小砂利を20％前後含み間隙があるものの比較的締まりがよい。柱アタリは確認できなかった。埋土中位と底面近くから各１点づつ土器片が出土している（第10図５）。Ｐ２は１辺が40～50cmの隅丸方形で、確認面からの深さは20cmである。埋土中から遺物は出土していないが、埋土の状況などがＰ１に似ているところから、Ｐ１と同時期の遺構と考えられる。

第10図５は、小型鉢形土器の胴部破片と考えられる。無文で、胎土には0.3～２mmの砂粒を含み、色調は暗赤褐～褐色を呈する。

２　時期不明の遺構

埋土中からその遺構の時期を特定できるような遺物が出土していない土坑が５基と、溝状遺構が１条検出されている。このうち、溝状遺構はその埋土などから現代のものと考えられるが、５基の土坑については、埋土の状況などから縄文時代の可能性もある。

ＳＫ16土坑（第９図、図版４）

調査区中央部MA48グリッド地山上面で確認された。直径80cmの円形を呈する土坑で、深さは25cmである。埋土は、１層が赤黒色（2.5YR1.7/1）を呈し径５mm前後の小砂利を10～15％含むのに対し、北側に分布する２層は同じ色調ながら径１～２cmの小礫を５％前後含んでいる。底面から一部生焼けの木片が出土した以外は遺物は出土していない。

ＳＫ13・14・15（第９図）

調査区北西部でまとまって検出された土坑である。この周辺は地山が砂礫層で、この砂礫層上面で遺構プランを確認した。

ＳＫ15は、長径80cm×短径60cmの略円形を呈し、深さは25cmである。埋土は赤黒色（7.5YR 1.7/1）土と砂利の混土で、砂利が50～60％を占め間隙が多い。

ＳＫ13とＳＫ14は一部で重複するものの（ＳＫ13が14に切られている）、埋土や形状からほぼ同時期に構築された土坑であると思われる。ＳＫ13の平面プランは、径60cmの円形で、中華鍋様の形状を呈し、最深部で10cmである。底面は砂利層のため、若干の凹凸がある。埋土はＳＫ15と同様である。

ＳＫ14は、径80cmの円形を呈し、形状・埋土共にＳＫ13とほぼ同様である。深さは最深部で18cmである。

３基いずれからも遺物は出土していない。

ＳＫ11（第９図、図版４）

調査区中央北部LT50グリッドの地山上面で検出された柱穴様の土坑である。平面形は直径60cmの円形を呈し、深さは60cmである。ほぼ垂直に掘られているが柱アタリの痕跡は見えなかった。埋土は１～４層に分けられるが、１・３層は赤黒色（7.5YR1.7/1）を呈する粒子の細かい土で、１層が小砂利を３％前後含んでいる。堅さはやや弱～普通である。２層は木の根のカクラン。４層は赤黒色土に粘性のある地山土ブロックと砂利を含んで堅く締まっている。遺物は出土していない。

ＳＤ01溝跡（第７図）

Ａ区中央部をほぼ南北に縦断する形で、耕作土除去後の地山面から検出された溝跡である。検出部分の長さ約20m、幅0.4～0.7m、深さ0.1～0.4mで、北側に行くにつれて深くなっている。本遺構は、Ａ区北東端部に分布する昭和に入ってからの整地層の一部を切っていることから、現代の溝跡であることが判明した。埋土中から遺物は出土していない。なお、Ａ区にはこの他に、直径30cm前後の柱穴様ピットが点在しているが、埋土の状況から、これらも現代のものである。

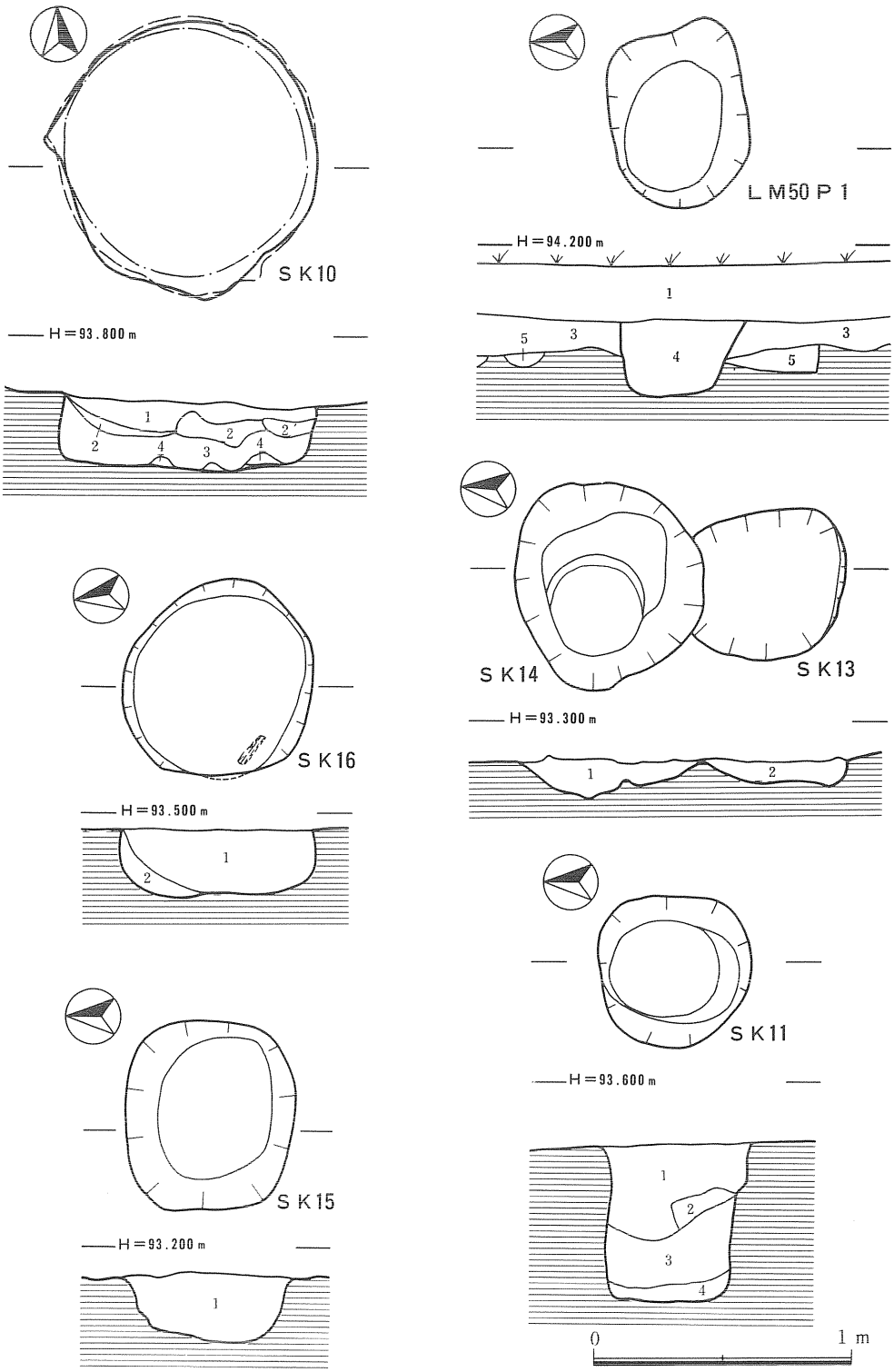
第２節　遺構外の出土遺物

遺構外の遺物として、縄文時代の土器と石器（剥片を含む）が、土器はＢ区東半とＳＫＦ03を中心とするＢ区南西部にやや集中して、剥片はＡ区とＢ区北東部にやや集中して出土している。

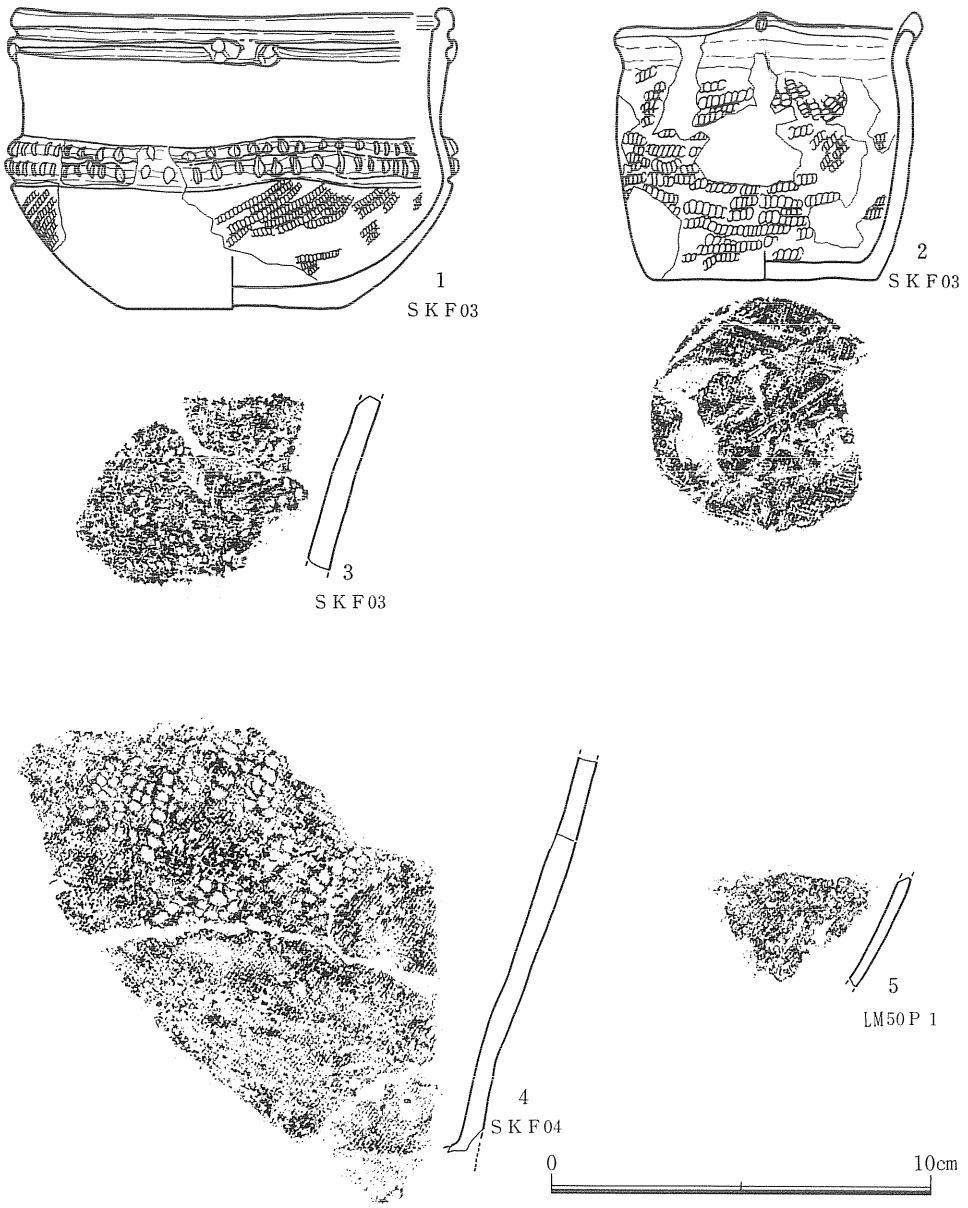
１　土器（第11図５～17、図版５・６）

遺構外から出土した土器は、平成２年度の範囲確認調査で出土したものも含めて20点である（接合したものについては、接合後を１点とした）。全て、縄文時代晩期のものと見られる。

第11図６は、平底から内湾気味の胴部を経てやや肥厚する口縁部に至る皿形土器である。推定される口径は22～23cm、高さ５cm前後で、全体の約８分の１の破片である。幅約８mmの口唇

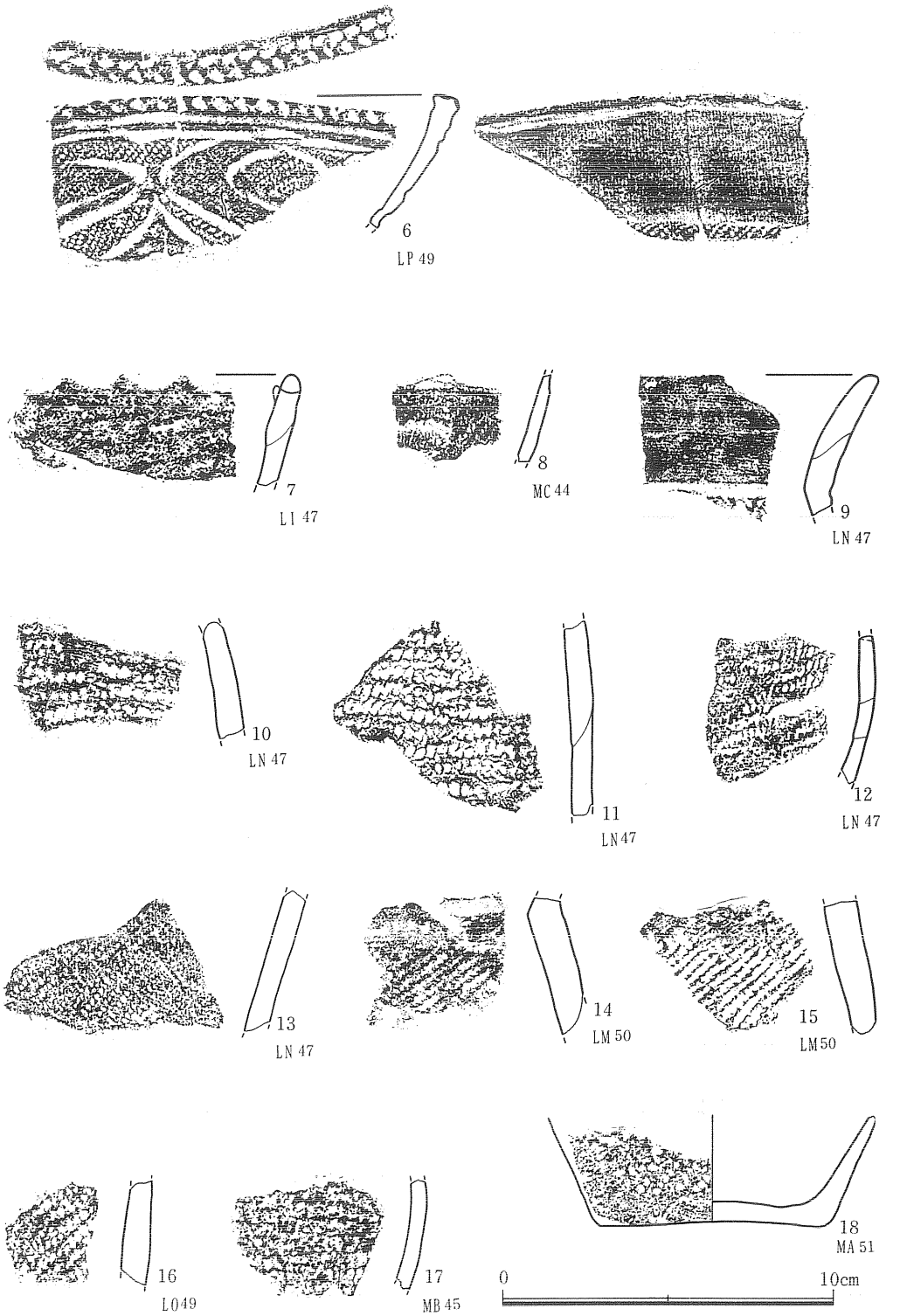


第９図　ＳＫ10・11・13・14・15・16土坑　ＬＭ50Ｐ１柱穴様ピット

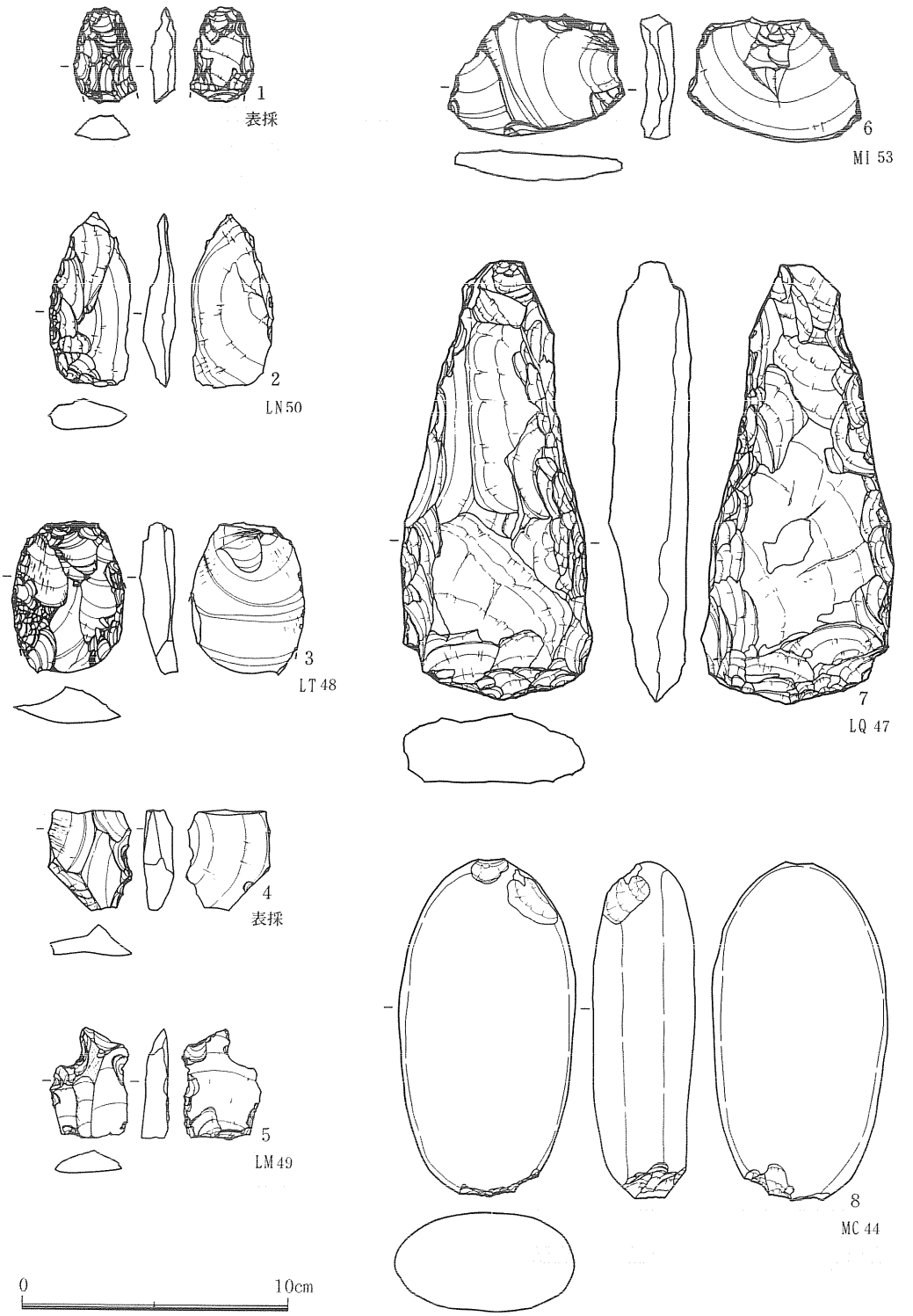


第10図　遺構内出土遺物

部には菱形の刻み目列を２条、口縁部には２条の沈線、その下に浅い沈線と充填縄文による雲形文が施されている。また内面には、口縁部に浅い１条の沈線、胴部中位やや下にＬＲ縄文の施された低い隆帯が巡っている。７は、口縁部が外側に屈曲する深鉢形土器の口縁部である。口唇部には指頭によると思われる押圧がやや斜めに施され、小波状口縁を呈する。口縁部は無文であるが、胴部には斜縄文が施されるものと考えられる。外面には、煤状炭化物がわずかに



第11図　遺構外出土土器



第12図　遺構外出土石器

残っている。胎土には径0.3～１㎜の砂粒を多く含み（25％程度）、焼成は良好である。８は、小型深鉢形土器の胴部破片で、拓本上端に横走する１条の沈線があり、その下に細密なＬＲ縄文が浅く残っている。９～11は、LN47グリッドから出土した同一個体の破片である。９が口縁部、10が胴部上半、11が胴部中位の破片と見られ、全体としては、頸部で屈曲する口縁部を持つ深鉢形土器と考えられる。口縁部は無文で、頸部に１条の沈線があり、胴部にはやや粗いＬＲ縄文が施されている。内外面にはベンガラと思われる赤色顔料が薄く付着している。胎土に含まれる砂粒は微細で（径0.1～0.3㎜）、割れ口の観察では、胎土の色調が青灰色で微細な気泡状の小孔が多く見え、胴部内面には砂粒が横方向に大きく移動したケズリ状の調整痕が歴然としている。13も９～11と同様な深鉢形土器の胴部下半の破片である。胎土と器面の調整痕も似ているが、胴部に痕跡程度に残っている縄文が９～11のもとは異なっている。12は９～11よりも小ぶりの深鉢形土器の胴部破片である。14・15は、LM50グリッドのＰ１周辺から出土した同一個体と考えられる深鉢形土器の頸部～胴部上半の破片である。９～11とほぼ同様の器形と文様構成になるものと思われる。やはり、内面には砂粒の著しい移動痕が残っている。16は深鉢形土器の、17は鉢形土器の胴部破片で、18は鉢形土器の底部である。18の外面は摩滅と剥落が著しく、ＬＲ縄文が部分的にしか残っていない。

２　石器（第12図１～８）

調査区内から大小の剥片を含む石器が29点出土しており、その中に定型的な石器や二次的な加工を施したものが８点ある。剥片は調査区東部に多く、定型的及び二次加工のある石器はＡ・Ｂ両区から散発的に出土した。

第12図１は小型の石篦の基部で、刃部側を欠損している。２は横長剥片の２辺に裏面側から二次加工を施した石器である。打面と反対の縁辺はヒンジで終わっており、二次加工は施されていないが、形態的には石篦状を呈している。３は弱い二次的な火熱によって下方が欠損しているものの、縁辺への二次加工のあり方、全体や断面の形状から、削器もしくは掻器と考えられる。４は、不定形剥片の１辺の２～３カ所に抉りを入れた抉入石器である。５は、刃部先端側を欠く粗い作りの石匙か抉入石器と思われる。６は先端がヒンジで終わる分厚い横長剥片の両側縁と断面部に急斜度の刃部を作出した削器か。７は板状の亜角礫の全縁に二次加工を施した打製石斧で、重さ382ｇである。８は、円礫の全面を平滑に仕上げた磨石で、長軸両端には敲打痕が残り、敲石としても使用されている。重量は419ｇである。

第５章　まとめ

新町遺跡は、秋田県南東部に位置する横手市南部の、小扇状地の微高地上に所在する縄文時代晩期の遺跡である。今回の調査は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財事前調査として、2,230㎡発掘調査された。

調査の結果、縄文時代晩期の袋状土坑２基、土坑４基、柱穴様ピット２基が検出され、該期の土器や石器が出土した。以下、検出された袋状土坑と出土した縄文土器について若干言及し、まとめとしたい。

〈袋状土坑について〉

今回の新町遺跡で検出された縄文時代の土坑のうち、ＳＫＦ03・04の２基は、坑口部よりも坑下半部もしくは底部が広い形態を呈しており、形状がいわゆる巾着袋に似ているところから袋状土坑と呼ばれるものである。坑口部よりも坑底部が広い土坑の呼称としては他にフラスコ状土坑（ピット）があるが、新町遺跡の、特にＳＫＦ04については、断面形状がいわゆるフラスコ状ではないことから袋状土坑とした。

袋状土坑あるいはフラスコ状土坑の機能については、主に、「貯蔵穴」説、埋葬施設である「土壙墓」説の二つがある。県内の縄文時代晩期の同様な遺構についても、増田町梨ノ木塚遺跡ＳＫ219[註1]や河辺町風無台Ⅱ遺跡ＳＫ15・17[註2]のように坑底部から多量の炭化栗等が出土した（フラスコ状）土坑では貯蔵穴とする見方が強く、これとは別に大館市家ノ後遺跡[註3]のように（袋状）土坑が群をなしその中には、①人為的に埋め戻され、②底面や埋土下部にベンガラの検出されたものがある、③坑底部に人為的においたと考えられる完全な土器の出土するものがある、等のことから、①～③のいずれかの特徴をもつ袋状土坑については土壙墓と考えられているものがある。新町遺跡のＳＫＦ03については、埋土が上部を除いて人為堆積であるが、その土は焼土や炭化栗を含む捨てられた土であること、ほぼ完全な形に復元できる小形鉢形土器が２個体分出土しているが、１個体は小破片となり坑内ほぼ全域に散在していること、１個体はまとまってはいるものの、割れて破片となったものをまとめて捨てたという状況で、２個体とも人為的に埋納されたものではなく、人骨やベンガラも検出されていない。またＳＫＦ04も、埋土が人為によるものか否か判然とせず、出土している土器も深鉢形土器の胴部下半の一部であり、副葬されたものではない。以上のことから、ＳＫＦ03・04を積極的に埋葬施設（土壙墓）とはできず、現時点では貯蔵施設としておきたい。しかし、ＳＫＦ03・04の周囲には形状や埋土の状況からは性格を特定できないが、ＳＫＦ03・04とほぼ同時に構築された小さな土坑ＳＫ06・07・08があり、今仮に、ＳＫＦ03・04を埋葬施設とした場合、ＳＫ06・07・08をこれに係わる

何らかの施設（墓標的な木柱など）と見ることも可能のようにも思われる。

なお、ＳＫＦ04の場合、たまたまセクションベルトが土坑の中心を通り、土層が現表土から観察できるように設定されたため、その構築面が分かり、全体の断面形が袋状を呈していることも分かったのであるが、これが確認面が地山面であった場合には単なる円形の土坑としか識別できなかったと思われる。土坑構築面が確認面よりも相当上にあった場合、該期の円形土坑がどのような原形であったかは不明で、地山面で確認された円形土坑の性格等についての判断を不確定なものにする場合のあることが知らされた。

〈出土土器と遺構群の時期について〉

今回の発掘調査で出土した土器の主なものは、第10・11図に示した土器群である。このうち第11図６は、胴部から口縁部が緩やかに内傾しながら外に開く平底の皿形土器である。口唇部に菱形の刻み目列が２条、口縁に１条の沈線、その下に充填縄文（ＬＲ縄文）による平滑な雲形文が施され、内面胴部下半にはＬＲ縄文が充填される隆帯を有している。また、同図７及び９～11（９～11は同一個体）は、口縁部が屈曲して外反もしくは外傾する深鉢形土器で、９～11は屈曲部に１条の沈線を有し、７は口唇部に斜位の刻み目をもって小波状口縁となっている。両者共に口縁部は無文で、胴部には緩やかに斜位に走るＬＲ縄文が施されている。

ＳＫＦ03から出土した２個の鉢形土器のうち、第10図１は丸みをもつ胴部に直線的に立ち上がる口頸部が付く器形で、胴部から口縁部にかけての断面形状は緩いＳ字状を呈する。文様帯は口縁部と胴部上端にあり、口縁部は器周４カ所に２個１対の貼瘤をもつ２条の沈線、胴部上端には縦位の刻み目をもつ２本の隆帯があり、胴部には緩い傾きのＬＲ縄文が施されている。２は、口径・底径・高さにそれほどの差がないコップ状を呈する鉢形土器で、短く外反する口縁部は無文で胴部には緩い斜位もしくは横位にＬＲ縄文が施されている。

以上が、今回新町遺跡から出土した主な土器群である。今これらの土器群の諸特徴を県内の諸遺跡出土例と比較してみると、６の皿形土器は、秋田市地方遺跡、五城目町中山遺跡、増田町梨ノ木塚遺跡などの例に類似するが、直線的な雲形文や内面の縄文が充填される隆帯などの特徴はそれらの遺跡には少なく、７、９～11の深鉢形土器は平鹿遺跡の土器棺群の一部に類例がある。またこれらを、該期の土器群が出土している宮城県摺萩遺跡[註４]や岩手県安堵屋敷遺跡[註５]の土器群と比較してみると、６は摺萩遺跡第Ⅵ期（大洞C_2旧式）の皿Ｂ、７・９～11は同遺跡第Ⅶ期（大洞C_2旧～Ａ式直前）の深鉢にほぼ一致しており、１・２は、器形とこれに施される文様モチーフが一致している例は県内外ともに確認できないが、これらは岩手県安堵屋敷遺跡鉢形土器Ⅴ～Ⅶ群や摺萩遺跡第Ⅶ期鉢Ｂとの類似を指摘することができる。従って、これら土器群は、従来の型式編年の晩期大洞C_2式ととらえることができる。

以上のことから、今回新町遺跡から出土した土器群は、その数こそ少ないものの、縄文時代

晩期大洞C_2式に帰属する一群と考えることができる。また、このような土器が出土したＳＫＦ03を中心とする縄文時代の土坑群もほぼこの時期に属する遺構群とすることができよう。

なお、第10図１の鉢形土器の内面全面と外面口縁部には、極暗褐色の漆が厚く付着しており、漆の表面には“チジミジワ”と呼ばれる微細な皺が多数見られる。漆精製の段階（「くろめ」）には、両の手に入るくらいの大きさの容器の中でゆっくりと撹拌する作業が必要といい[註６]、この土器はまさに“掌（たなごころ）”の大きさであり、この作業に用いられた容器とすることができよう。

註

1　秋田県文化財調査報告書第63集『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県教育委員会1979（昭和54年）

2　秋田県文化財調査報告書第125集『七曲台遺跡群発掘調査報告書』秋田県教育委員会1985（昭和60年）

3　秋田県文化財調査報告書第229集『曲田地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－家ノ後遺跡－』秋田県教育委員会1992（平成４年）

4　宮城県文化財調査報告書第132集『摺萩遺跡』宮城県教育委員会・宮城県土木部水資源開発課1990（平成２年）

5　岩手県埋蔵文化財センター『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書－添市川筋河川改良事業関連』（財）岩手県埋蔵文化財センター・岩手県土木部

6　高橋忠彦氏の教示による。

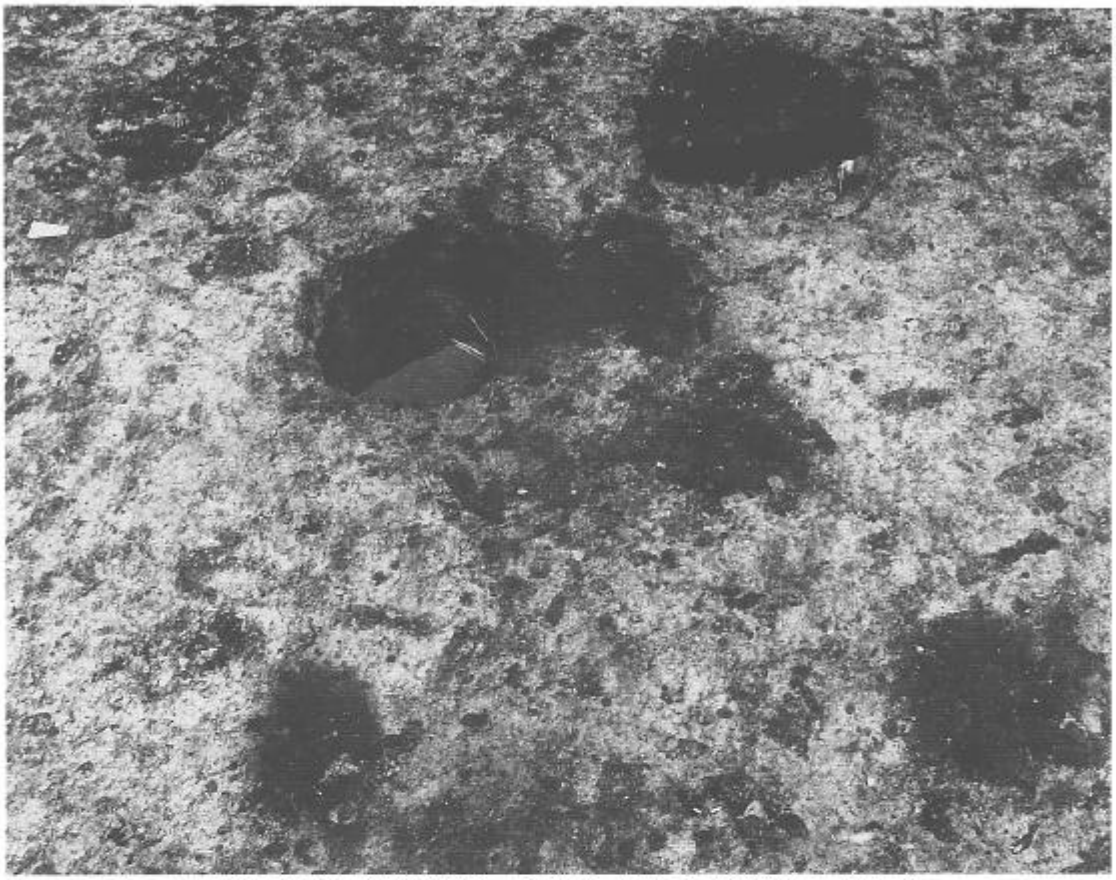
1．新町遺跡遠景（東▷）

2．新町遺跡調査区遠景（東▷）

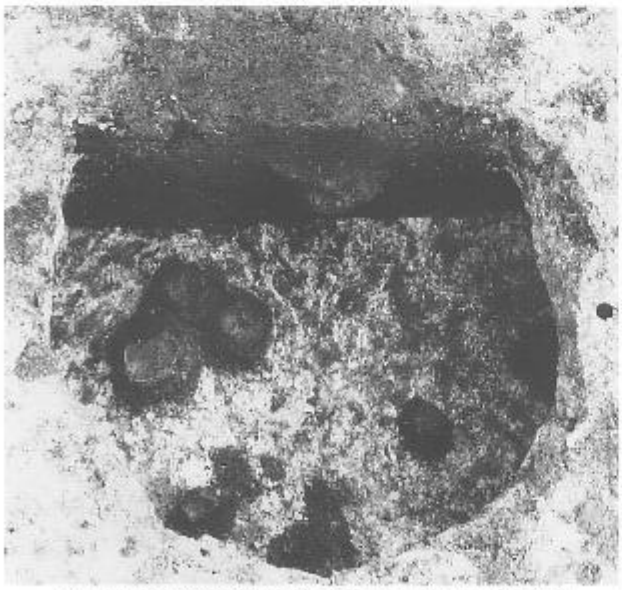
図版2

1．調査区全景（西▷）

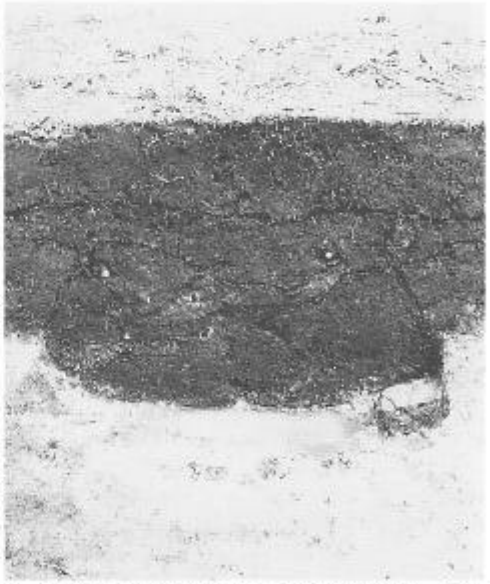
2．B区全景（南西▷）



1．ＳＫＦ03･04袋状土坑、ＳＫ06～08土坑 検出状況（西▷）

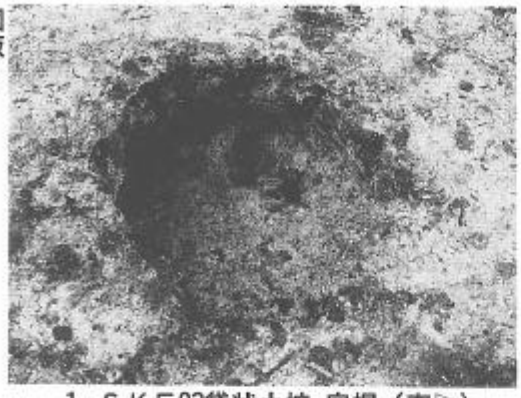


2．ＳＫＦ03袋状土坑 土器出土状況（北▷）



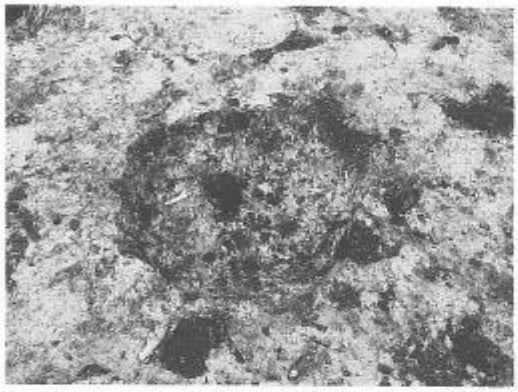
3．ＳＫＦ04袋状土坑 土層断面状況（西▷）

図版4

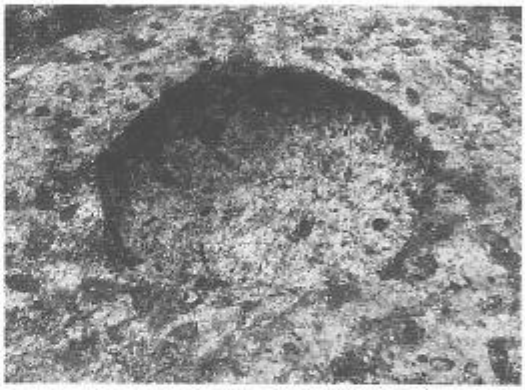


1．ＳＫＦ03袋状土坑 完掘（南▷）

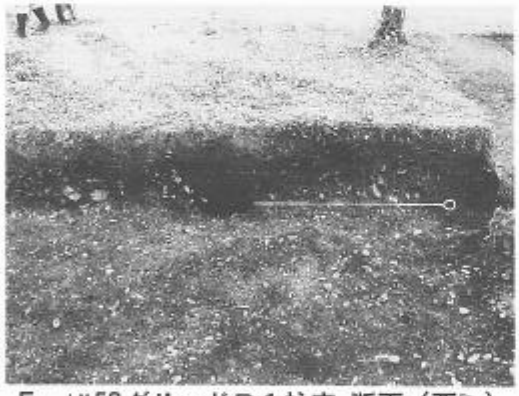
2．ＳＫＦ04袋状土坑 完掘・土器出土状況（東▷）



3．ＳＫ08土坑 完掘・土器出土状況（東▷）

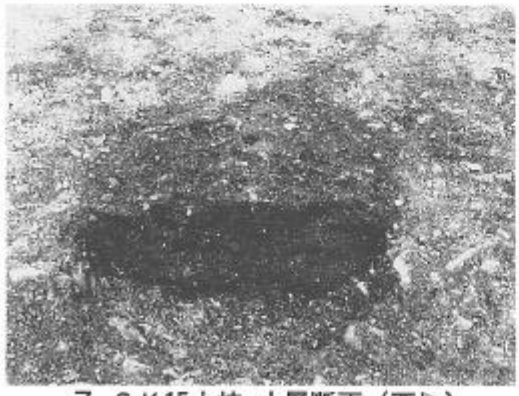


4．ＳＫ10土坑 完掘（南東▷）

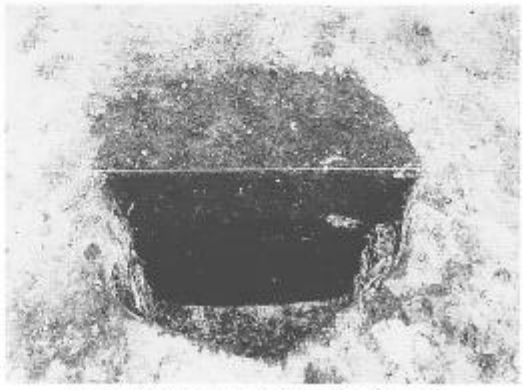


5．LM50グリッドＰ１柱穴 断面（西▷）

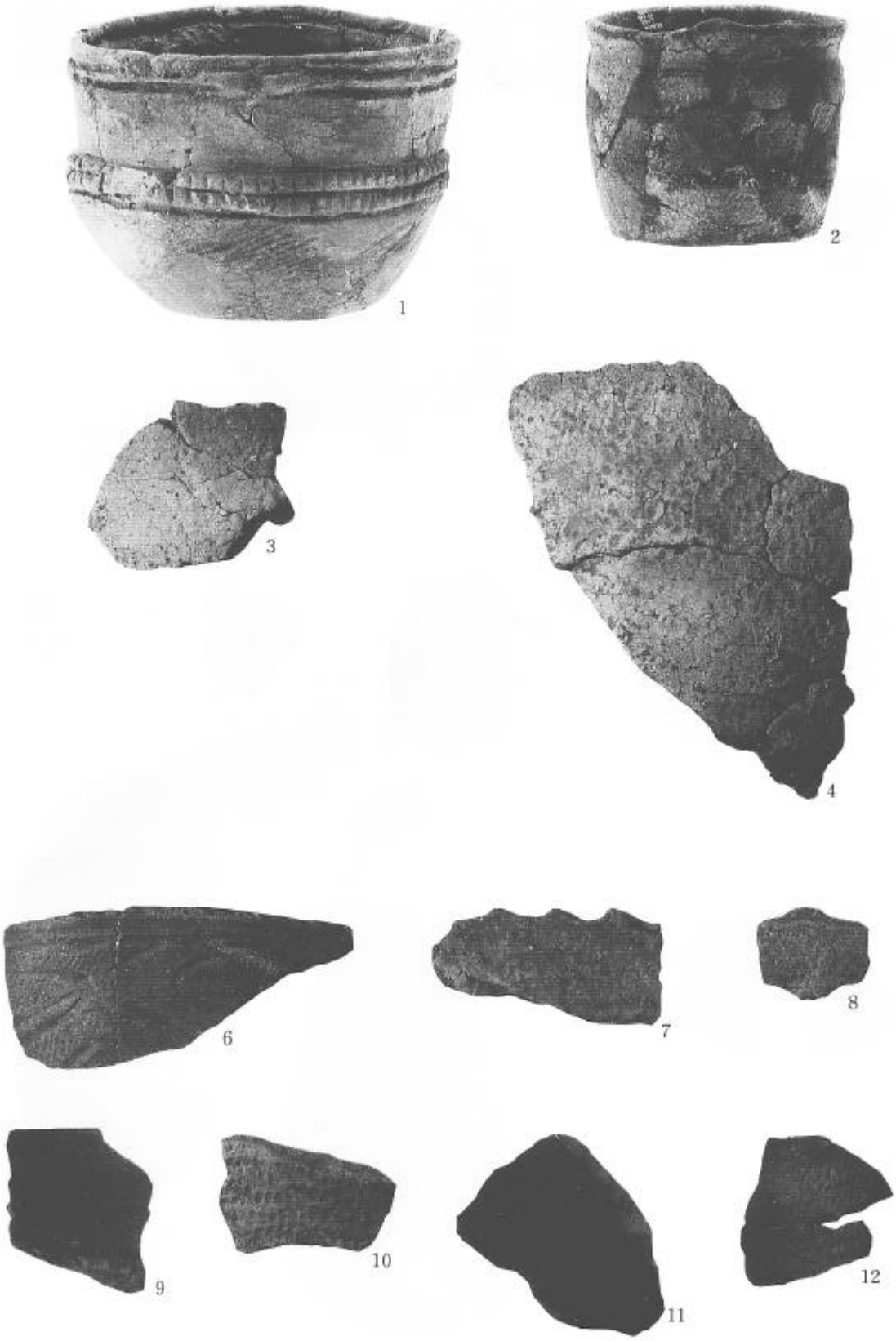
6．ＳＫ16土坑 完掘（北▷）



7．ＳＫ15土坑 土層断面（西▷）



8．ＳＫ11土坑 土層断面（西▷）



遺構内出土遺物・遺構外出土遺物(1)

図版6

13

14

15

16

17

18

1

2

3

4

5

6

7

8

遺構外出土遺物(2)